



龍華山永慶寺・諸寮舎の復元研究

k98026 草野 聡美

1章 はじめに

1-1 研究の背景及び目的

本研究では、江戸中期宝永年間に甲斐の国山梨郡岩窪村（現甲府市岩窪町）に甲府城主柳沢吉保の菩提寺として建立された、黄檗派龍華山永慶寺の建築を取り上げる。同寺の伽藍建築は現在そのほとんどが失われている。そこで、残された数点の史資料と類似建築の実測調査および修理報告書に基づき、その具体的な建築像を復元し、先行研究とあわせて永慶寺伽藍の全体像を、コンピュータグラフィックスにより視覚的に明らかにする。その上で、永慶寺伽藍の建築を譲り受けたという伝承を持つ古府中町禅林院の本堂と、永慶寺伽藍・寢室との関係を明らかにすることを目的とする。

1-2 研究の方法

- 残されている史資料を整理し、その内容を解読・把握する。
- 移築されたとされる建築の実測調査資料を整理・分析し、構造・意匠を把握する。
- 黄檗山万福寺諸寮舎等、類似建築の解体修理報告書および実測調査資料を収集し、内容を把握する。
- 上記に基づいて各部材・各棟を復元設計し、CADを用いて可視化する。
- 移築されたとされる建物と、復元した建築を比較・分析し、関係を考察する。

2章 禅宗黄檗派とその建築

2-1 黄檗派の伝播と浸透

黄檗派とは、承応3年（1654）中国福建省の隠元により伝えられた日本の禅宗の一派である。

本来同派は、伽藍様式や宗教上の諸式が鎌倉時代に伝えられた禅宗と異なっていたため、臨済宗黄檗派、あるいは禅宗黄檗派と呼ばれた。

江戸時代に唯一の海外貿易港であった長崎には、指導教員 伊藤洋子教授

寛永正保の頃から長崎在住の華商や、日本の鎖国後も南方方面から長崎に往来していた船主・商人等が長崎に「唐三箇寺」と称される3つの寺院を創建し、明国僧を招いて従事させていた。そのような状況下において隠元の渡来が実現したのである。当初幕府は隠元に対し慎重な姿勢をとったが、1655～58年には積極擁護の姿勢をうちだし、近世で唯一の外来新宗教として位置づけられる。

2-2 黄檗宗建築について

大本山は宇治市の黄檗山萬福寺で、その建築は、中国的な雰囲気を与えた。黄檗天井や複雑な輪郭を持つ浮き彫りを施した礎盤、円形の窓等は、黄檗宗建築の顕著な特徴であり、異国的な雰囲気を感じさせる建築様式の例である。ほかの禅宗様式と比べて、伽藍配置においては、①僧堂に代わって禅堂・齋堂がついに配置されている。②天王殿がある。③庫裏が齋堂の裏にある。など顕著な違いも見られる。

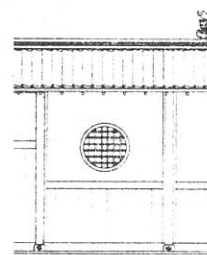


図1 円形窓



写真1 礎盤

3章 龍華山永慶寺について

3-1 柳沢吉保と永慶寺

江戸中期、柳沢吉保が甲府領主となった宝永元年（1704）から享保9年（1724）までの柳沢家領有期は、近世甲府城下にとって繁栄の時代であるとされる。吉保は、武田家の流れを汲み、五大將軍徳川綱吉の側用人として権勢を振るった。甲府城郭の修繕、都市の整備を行ない、物資の流通の活発化など、都

市をとりまく生活環境を向上させた。

永慶寺は、吉保が宝永2年（1705）に建立を幕府に願い出してから、宝永4年には大地震、富士宝永山の噴火など、相次いで記録的な天災にみまわれながらも宝永7年8月15日に開堂を迎える。

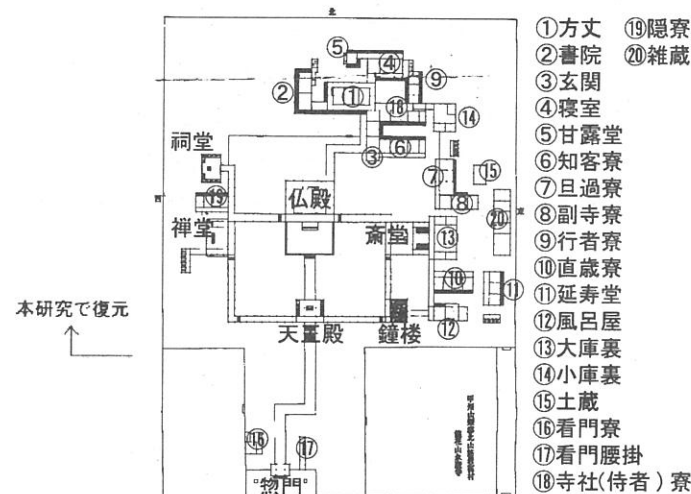


図2 永慶寺伽藍図

表1 秋篠家文書木割書による内容の一覧

1 仏殿	5 祠堂
2 禅堂・齋堂	6 惣門
3 鐘楼	7 伽藍地形の覚
4 天王殿	

3-2 永慶寺伽藍の破却と移築

永慶寺は、享保9年（1724）柳沢吉保の子吉里の大和郡山転封に伴って取り壊され、伽藍跡には現在護国神社が祀られている。伽藍は、4月3日よりおよそ40日あまりで一棟も残さず取り壊されたという。大泉寺に贈られたとされる仏殿・惣門など、破却された建物と同時にほかの寺院に送られたことが文献から明らかな建物もある。

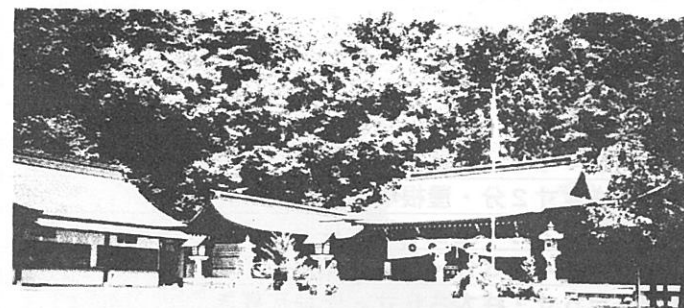


写真2 護国神社



写真3 大泉寺惣門

3-3 永慶寺の基本史資料

本研究において分析対象とした史資料は、次の5点である。

- ①大和郡山柳沢文庫蔵「龍華山御建立以来諸色書留」
龍華山永慶寺の造営の経緯について詳細に記された資料である。
- ②大和郡山永慶寺蔵「伽藍図」（図2）
吉里が大和郡山に転封となったあとに営んだ郡山永慶寺には、甲州永慶寺の伽藍図が残されている。伽藍の様子を知ることができる資料である。
- ③山梨県立図書館甲州文庫所蔵「仏殿重興募化牒」
永慶寺破却の経緯と大泉寺への仏殿移築の計画を記した資料である。
- ④黄檗大工、秋篠家所蔵「木割書」
永慶寺建立の実際の担当者は、本山萬福寺の大工、秋篠八右衛門とその弟子の平野喜八郎である。現在も宇治市の秋篠家に所蔵されている古文書のうちの一点である。
- ⑤黄檗大工、秋篠家所蔵「龍華山永慶寺諸伽藍目録」
④の資料が清書され、建地割が付けられた資料である。

4章 研究対象の建築について

4-1 永慶寺諸寮舎

本研究で対象とするのは、永慶寺伽藍配置の基本構成建築である七堂伽藍（惣門・天王殿・仏殿・鐘楼・祠堂・禅堂・齋堂）以外の建物であり、主に僧が生活するための諸寮舎各棟である。諸寮舎とは「龍華山永慶寺諸伽藍目録」によれば、書院・方丈・玄関・寢室・甘露堂・知客寮・旦過寮・副寺寮・隠寮・行者寮・待者寮・延寿堂・風呂屋・大庫裏・小庫裏・

土蔵・柴小屋物置・看門寮・看門腰掛・裏看門をさすが、現在大和郡山の永慶寺が所蔵している旧永慶寺伽藍図には柴小屋物置・裏看門についての記載はない。

書院とは学問所、方丈とは住持の居間を指す。甘露とは不老を得られる天酒のことで、転じて不老涅槃の理想郷を指す。知客とは禅寺において客を接待する役僧、副寺とは住持を補佐する六知事の一、侍者とは住持の給仕、行者とは雑役をする僧をそれぞれ指している。隠寮とは住持職を引退した禅僧の隠居所であり、延寿堂は病僧が療養する場所、旦過寮とは永慶寺を訪れる雲水行脚僧を宿泊させる施設である。庫裏とは台所であるが、永慶寺では齋堂に直結して設けられた厨房としての大庫裏と方丈の先に設けられた奥向きの小庫裏とがある。

5章 永慶寺諸寮舎の復元

5-1 木割書の判読及び解釈

本研究で基本史資料とした「木割書」による諸寮舎の内容を表2に記す。

5-2 永慶寺諸寮舎各部材の復元

例として寢室の復元の一部を記す。

①柱

柱の形状については、木割書に「柱太さ4寸6分」とあるので4寸6分(138mm)角で復元した。

また、柱の面取りについては、参考とした萬福寺東・西方丈のうち、東方丈の修理工事報告書に

「面取りが非常に少ないのが特徴で糸面のようなものである。」とあるので、寢室の柱にも同様の面取りがあったと思われるが、先行研究との兼ね合いから、視覚的な違いを得るため、今回の復元では再現しなかった。

②地面から軒桁上端までの割付

地面から軒桁上端までの割付については、「軒高さ1丈2尺(3,600)」と記載があるのみである。そこで、「匠明一殿屋集一」を参考に、地面から敷居下端、内法高さ、鴨居上端から軒桁上端の寸法値をそれぞれ720、1,800、1,080と考え復元した。

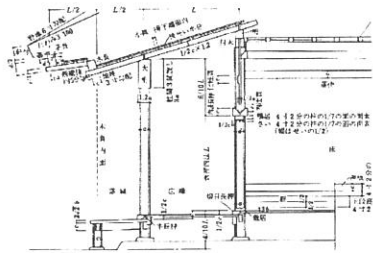


図3 匠明一殿屋集一

③垂木

垂木については、木割書に記載が無いが、萬福寺東方丈の垂木が3寸×2寸(90×60)の黄檗垂木で一軒であることから、永慶寺寢室の垂木も同様の黄檗垂木の一軒であると考え、復元した。

5-3 CADによる立ち上げ

設計した各部材を使い、CADにより立ち上げた寢室のCGを図に示す。

表2 秋篠家文書木割書による諸寮舎の内容

1 方丈(ホヅヨ)	5間×9間・軒高さ1丈3尺・内法6尺2寸・柱太さ6寸
2 書院	2間半×7間・3方5尺庇・軒高さ1丈1尺・内法6尺・柱太さ5寸8分・妻破風狐格子
3 玄関	2間半×9間半・軒高さ1丈2尺5寸・柱太さ7寸・妻破風狐格子
4 寢室	5間×7間半・軒高さ1丈2尺・柱太さ4寸6分・妻破風狐格子
5 甘露堂(カンロ)	2間×2間・3方半間庇・軒高さ1丈1尺・柱太さ4寸・屋根小棟造り
6 知客寮(チカ)	4間×8間半・軒高さ1丈1尺5寸・柱太さ4寸5分・破風狐格子
7 旦過寮(タンカ)	2間半×8間・軒高さ1丈1尺・柱太さ4寸2分・屋根小棟造り
8 副寺寮(フス)	2間半×6間半・軒高さ1丈1尺・柱太さ4寸2分・屋根小棟造り
9 行者寮(アンジャ)	3間半×5間半・軒高さ1丈1尺・柱太さ4寸2分・屋根小棟造り
10 直歳寮(シスイ)	2間半×7間・軒高さ1丈1尺・柱太さ4寸2分・屋根小棟造り
11 延寿堂(エンジュ)	3間半×6間・軒高さ1丈1尺5寸・柱太さ4寸5分・屋根小棟造り
12 風呂屋	2間半×7間・1尺半庇・軒高さ1丈2尺5寸・柱太さ6寸・屋根瓦葺き
13 大庫裏(オクリ)	4間×8間・軒高さ1丈2尺5寸・側柱6寸・中柱1尺・屋根瓦葺き
14 小庫裏(コクリ)	4間×8間・軒高さ1丈2尺5寸・柱太さ6寸・屋根瓦葺き
15 土蔵	2間半×3間半・軒高さ1丈2尺・柱太さ6寸・屋根瓦葺き
16 物置	3間×12間・軒高さ1丈・柱太さ5寸・屋根小棟造り
17 看門寮(カンモン)	3間×4間・軒高さ1丈1尺・柱太さ4寸2分・屋根小棟造り
18 看門腰掛	6間・梁7尺・屋根片屋根前折庇

6章 結論

6-1 永慶寺伽藍

先行研究とあわせた永慶寺伽藍の全体像を図に示す。

6-2 禅林院本堂と永慶寺寢室との関係の検証

禅林院本堂は現在、建て替えにともない失われているが、当時の実測調査資料が残っている。本堂にはかなりの改造の痕跡が見られるが、本堂を復元した平面図は、永慶寺寢室の平面構成とよく似ている。

①共通点

禅林院本堂の柱の実測寸法135~140mmに対して、史資料により復元した寢室の柱138mm角と近似値を示している。また、平面形状では、禅林院本堂に見られる4畳分の広縁の間が、復元した寢室にも同じように見られる。

②相違点

実測調査当時の禅林院本堂と復元した寢室は、その規模が倍近く違う。また、屋根形状はそれぞれ切り妻造りと同じであるが、棟方向が90度違う。

相違点のうち、屋根については、転用材により後から架けなおされたものであることが、小屋組の調査資料から明らかである。さらにその規模についても永慶寺寢室の一部を切り取って移築されたという

ことも考えられることから、永慶寺から建築を譲り受けたという伝承と前述の共通点をもって、禅林院本堂は、移築された永慶寺寢室であった可能性は比較的高いと考えられるのではないだろうか。

6-3 おわりに

本研究では、2つの研究目的のうち、禅林院本堂と寢室の関係において、移築の可能性について深く探るには、今一步踏み込んだ禅林院本堂についての復元が必要であったといえる。

しかし、永慶寺伽藍の全体像を視覚的に明らかにすることについては、かなりの成果があげられたのではないと思われる。

参考文献

「重要文化財 萬福寺西方丈修理工事報告書」
京都府教育委員会 1983年12月
「重要文化財 萬福寺東方丈修理工事報告書」
京都府教育委員会 1981年6月
研究論文「近世木割書に基づく祠堂・鐘樓の復元研究」
鶴田暁 御田村真毅
「木造住宅の設計法」 大庭孝雄 著 学芸出版社
1985年7月
「日本建築史図集」 山本 泰四郎著 彰国社
1949年6月
「社寺建築」 広江 文彦著 金竜堂
1956年10月

